



○花火

新潟県長岡市の花火大会の風景⇒

毎年8月初旬に開催される長岡の大花火大会が2年連続中止となりました。そもそも花火は慰霊や疫病退散が目的の催事だったことを思うと、コロナ禍にあって、それすらできないことが残念でなりません。ですが、夏に三刀屋高校の校地内を打ち上げ場所に花火大会が開催されることになりそうです。秋には研修旅行や受験旅行に普通に行けることを願うばかりです。



ちなみに写真の長岡の大花火大会をまだ観に行ったことはありません。長岡駅を降りたところにあるアオーレ長岡シアターの3D映像で観て、花火大会を観た気になったのが6年ほど前のことです。そもそも長岡に行った目的は、雁木の街並みと山本五十六記念館や山本五十六の生家を訪ねることでした。

山本五十六は、米100俵の話で有名な長岡の地で生まれた、真珠湾攻撃を計画した旧日本海軍連合艦隊司令長官であった軍人です。10年ほど前の映画では、役所広司が演じました。

米100俵の話とは、戊辰戦争で薩長連合軍に大敗した長岡藩の人たちが、食べるものにも困っているのを見かねた他藩から義援米として送られた米100俵を、「どんな苦境にあっても教育をおろそかにできない」として学校設立にあてた話です。長岡藩の生活信条で、山本五十六の座右の銘であった「常在戦場」。この言葉は、日頃から無駄を省き蓄財に心がける気風、創意工夫と斬新な行動をする気質をつくったと言われています。その精神が米100俵の精神につながっているのだと思います。気風をつくる言葉、福島県の会津若松藩で言えば、「一、卑怯な振舞をしてはなりません。一、弱い者をいじめてはなりません…ならぬことはならぬものです」などで有名な什(じゅう)の掟でしょうか。雲南で言えば、永井隆博士の言葉、「如己愛人」でしょうか…

さて、山本五十六は、父親が56歳の時に六男として生まれました。私が高56歳ということもあり、あらためて彼の著書を紐解いてみました。彼は多くの言葉を残しています。その中でも特に有名なのが次の言葉です。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、誉めてやらねば、人は動かじ」

人材育成(教育)として、「まずは先生・リーダーがやってみせる。次は説明して理解させる。そしてやらせてみる。そこでできたことはきちんとほめる。そうでないと人は動かない。」という考え方です。ただし、ほめるというのは、おだてるということではなく、共に成功や成長を喜ぶということです。

これには続きがあり、「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。」

「やっている姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

あさって7月7日は七夕です。日本史では、この日を日中戦争のはじまりとなる盧溝橋事件の日として教えます。5月9日の国恥記念日や9月18日の満州事変勃発の日など、加害者となった歴史的な日を覚えている日本人は多くないと思います。今から10年以上前に盧溝橋に行ったことがあります。今は平和な風景の中にあるその橋で、旧日本軍が起こした事件を発端に多くの人々が亡くなったことに思うと身につまされました。

平和を愛した永井隆博士ゆかりの地にある高校の生徒として、平和の意味をあらためて考えてみる夏にしてもらいたいと思っています。8月9日が長崎に原爆が投下された日です。

平和が続いた江戸時代に、火薬の平和の使い道として発達した花火。山本五十六のふるさと長岡で花火大会が開かれていることは、決して偶然ではないと考えています。海軍軍縮条約締結への努力など、軍人の立場で世界平和と日本の安全に働いた人との解釈もされている人だからです。…「この身滅すべし。この志(平和の希求)奪うべからず。」…反対することで命を狙われたとしても三国同盟に反対するという彼の覚悟を書いた決意文の言葉です。「人間は自己の力ですべてをやらねばならぬ、人にたよってはならぬ。」…